――これは桃井 愛莉がキワモノAV女優に堕とされる裏で起こっていたもう一つのお話…。

「……愛莉ちゃん、私は…何があっても愛莉ちゃんの味方だから。……だから…一緒に乗り越えて行きましょうね」

「……ありがと」

あの日…愛莉ちゃんが何を隠していたのか…何を言おうとしていたのか…。私には分からなかった。…聞いてしまってはいけない気がして、理由を聞く事も出来なかった。
こちらを振り向かずに呟いたありがとうの一言がいつもより少し震えていた気がした。

でも大丈夫よ、愛莉ちゃん。
きっと…きっと私がなんとかしてみせるから…。
だから…だからもう少しだけ…待っててね。

―――

「おう…ようやく来たかｗ今日はちょっと遅かったんじゃねぇか？俺が呼び出してから５分以内に来いっていつも言ってるよな？ｗえぇ…おい？」

「ご…ごめんなさい…。愛莉ちゃん達と一緒に居たから誤魔化すのに時間がかかったの…。これでも走って来たんだから…」

雫は走って乱れた髪を軽くとかし、荒くなった息を整えながら答える。
ここはあるラブホテルの一室。そこに男女が２人きり。そこでやる事なんて決まっている。
そう言いたげな顔をした男は女に自分がベッドに座っている隣に座る様に手招きをした。
それに対して雫の表情は硬く、とても今から熱い時間を過ごすとは思えないものだった。
しかし、雫は男の目の前でスルスルと可愛く着飾っていた服を脱ぎ捨て下着だけを身につけた状態になり、恐る恐るといった様子で男の隣に腰掛けた。

「やっぱ何度見てもお前の裸は綺麗だなぁ…w…おいおいそんなに怖がんなよｗもうお前とこうやって会うのも３回目じゃねぇか…wそろそろ慣れろってｗお前だってシてる時は気持ちよさそうにしてんだろ…？w」

「そっ…それは貴方がっ…～～～～～っ！？///」

男は口答えしようとした雫の唇を突然奪い、問答無用で舌を入れる。その間、右手は雫が逃げられない様にしっかりと後ろ頭を掴んで固定し、左手では胸を弄る。
胸の全体を弄る様な手つきで右…左…と交互に揉みしだき、その手は徐々に身体全体を弄る様に背中…尻…太ももと移動していく。
その慣れた手つきから男側は相当女慣れしてる事が窺える反面、雫の方は両手の行き場を無くし徐々に身体の力も抜けて遂には男の身体へともたれ掛かってしまった。

「ぷはぁっ…はぁ…はぁ…はぁっ…げほっげほっ…」

「おいおいｗちょ〜っとキスしたぐらいじゃねぇかｗそんな咽せる事ぁねぇだろｗそれに…クククッ…それが今から抱いてもらう男に対する目か…？ｗなぁ…雫？ｗ」

「はぁっ…はぁっ…はぁ……。…貴方って本当に最低ね……」

「おぉ〜ｗ怖い怖いｗだが…いつもニコニコしてるアイドル様が俺にだけ向けてくれる嫌悪感丸出しの視線ってのも悪くねぇ…w」

男はそう言いながら机に置いてあったグラスに入った酒を勢い良く飲み干した。
ご機嫌そうに酒を煽り自分に対して好き勝手にしてくる男に対して雫は何もやり返さない。
いや…やり返せないのだ。

MORE MORE JUMP!! を結成して半年が経った頃、最初こそ元アイドルの３人とアイドル志望の素人1人がアイドルを結成した！と話題になっていたモモジャンだったが、現実は甘くなかった。
一度は辞めたアイドルをもう一度目指してみよう。そして…見てくれる皆に、応援してくれる人達に笑顔を届けよう。その想いを胸に活動を再開したアイドル活動だったが、事務所に所属していないフリーのアイドルというものはやはり業界柄厳しく、配信活動などで地道にファンの数を増やしては居るが…どうにも次に繋がらなかった。

そんな時、雫の元へ是非MORE MORE JUMP!! を支援したいという内容の手紙が自宅へと届いた。
手紙の主が待ち合わせとして指定した場所はとあるラブホテル…そこで待っていたのは他でもないこの男だった。

「最初の頃の雫は可愛かったよなぁ〜ｗ『お願い…！愛莉ちゃんを…MORE MORE JUMP!! を守れるならなんだってします…！』つって…wだからこうやって定期的に仕事回してやってんだからちょっとは俺に感謝しろよ…？ｗ」

「…分かってるわ…」

あの日、雫はMORE MORE JUMP!! への支援を条件に自分の身体を差し出した。
もちろん、今までそんな経験は1度もない。
アイドル業界に居た時はやれあのアイドルはあの大物俳優と寝ているだの、あのアイドルはプロデューサーの女だのと聞こえて来たものだが…そんな物を全て無視しても問題ない程に日野森 雫という女は天性の才を持ったアイドルだった。
しかし、そんな雫をよく思わない同僚と上手くいかず…雫はあれよあれよと一度は芸能界を去ったのだ。

「まぁまぁそんな顔すんなってｗどうせヤりだしたら気持ち良くなんだからｗ楽しもうぜぇ〜？ｗそれに…俺は個人的にお前の事が気に入ってんだ…じゃねぇとこんな事はやんねぇよ？ｗ俺ぁこの業界じゃちとばかし名が通るんでね…w忙しい時間の合間を縫ってこうやってお前と遊んでやってんじゃねぇか…w」

「…くっ…ありがとう…ございます……///」

男は雫の胸を豪快に揉みながら語るが、雫はそれに感謝の言葉を発する事しか出来ない。
男の機嫌を損ねてしまえば、今MORE MORE JUMP!! に対して支援を打ち切られてしまう…。

「(私が…私が少し我慢するだけだもの…大丈夫。今までだって大丈夫だった…だから…今日も大丈夫…)」

「クククっｗまぁ良い…夜はまだまだこれからだからな…ｗまた色々と俺が仕込んでやるよ…ｗそうだ…今日は少し変わったプレイでもして楽しもうぜｗ」

「か…変わったプレイ…？あまり痛いのはイヤよ…？」

男がそう提案すると雫は目を丸くする。
今日も前回の時同様に乱暴に扱われただ犯されるだけだと思っていたからだ。

「なに…そんな難しい事じゃねぇよｗそういや俺が見てこいって言ったAVは全部見て来たか…？」

「え…えぇ…。ギャルの女の子がいっぱい出てくるアダルトビデオでしょ…？私…そもそもアダルトビデオなんて見た事なかったから…その…」

「…家で1人で見て興奮したか？ｗ」

「……そ…そんなこと…」

2回目の逢瀬の後、男は次に会う時までにこのUSBメモリに入っているAVを見ておけと雫に指示を出していた。
そのどれもが所謂“ギャル”と呼ばれる女の子が男に犯されたり、逆にギャルが男を襲い心が痛くなる様な罵倒をしながら犯す内容の物だった。
中には元は普通の女の子だったが、男と関係を持つ様になってから男の趣味に染まりギャルになってしまうという内容の物もあった。
今までの人生で1度もAVなど見た事がなかった雫は、男から渡された内容をどこかファンタジーの様に思っていたが、画面の中で男に乱暴にされる女の姿を見ると興奮している自分もいた。

「まぁ良い…ｗお前にそのギャルモノのAVを見せたのはお前の頭に“ギャル”の知識を入れる為だったからな…ｗ」

「ぎゃ…ギャルの知識…？」

「そう…お前は今からAVで見た様な頭の弱〜いギャルになりきって俺とSEXする…ただそれだけだ…ｗどうだ？別に痛くないだろ？ｗ」

男はサラサラと雫の綺麗な色をした髪の毛を弄りながら楽しそうに答える。
確かに痛くはない。痛くはないが…どうして男がそんな提案をするのか…雫には理解が出来なかった。

「頭の弱いギャル…？どうしてそんな…」

「雫にはまだ恥じらいがある…それを少しでも無くせば素直に楽しめる様になるっていう俺からの優しさだ…wお前もたまにはいつもとは違う自分になってみたいだろ…？w」

「いつもと…違う自分に…」

『いつもと違う自分』。
確かに、空を飛びたいから翼が生えたら良いなとか、人魚みたいにヒレがあれば良いな…みたいな事を考えた事はあるが、自分が全くの別人になってみたい…そう考えた事は雫の人生では1度もなかった。
でも少し…ほんの少しだけ…今この瞬間、興味が無いと言えば嘘になってしまう様な感情が芽生えた。

「そう…wまずはその一人称を『私』じゃなくてあのAVに出て来たギャルみてぇに『ウチ』にしてみろwそれと喋り方もギャルっぽくなwちゃんと見たなら覚えてるよな？wそれに……やらなきゃどうなるか…賢い雫なら分かるよな…？w」

「っ…わ…分かったわ…」

そうだ。どうせ逆らう事は出来ない。
ここで男に逆らえば今まで自分が頑張って来た事も無駄になる。
何より他のメンバーに迷惑がかかってしまう事を考えれば雫に選択肢など無いに等しい。

「チッ…そうじゃねぇだろっ！！」

「ひっ…！わ…わかった〜💕じゃ…じゃあ…ウチは今からギャルでぇ〜す…💕こ…こんな感じぃ〜…？💕」

「まだまだ硬いが…最初ならそんなもんだろ…wここからどんどん堕としていくのもまた一興か…wそれと…今の間だけは俺の事は“ダーリン”って呼べwその方が頭の弱いギャル感出るからなw」

「…っ…！わ…分かった〜…よろしくねダーリン💕」

この行動が、雫にとって運命の分岐点になるとは今はまだ知らなかった。

「さて…と…それじゃあまずは…前戯から始めるか…w淫乱なお前はもうマンコとろとろかもしんねぇが…こういうのは準備から盛り上げていくもんだからな…w」

「…とろとろ……ちっ…違うし！ウチのお股はまだとろとろなんかじゃ──」

「おいおい、ギャルが自分のマンコの事お股なんて言うか？w『マンコ』だ、マ・ン・コwついでにてめぇがおちんちんって呼んでるのは『チンポ』だw今のオメェはギャルなんだからそういうところしっかりしねぇと…な？w」

男は雫の言葉を遮る様に訂正を促す。
雫は男に指示されたAVを見るまで女性器の事をマンコや、男性器の事をチンポと呼ぶ知識すら無く、自分自身今までそんな事を口にした事は1度もなかった。

「それに…アイドルには演技力も必要だからなぁ？w」

「ま…マンコ…。ごくっ…。わ…分かったわ…。う…ウチのマンコはとろとろなんかじゃね…ねーし…！💕まだ全然濡れてなんかないから！💕」

言葉とは裏腹に、既に雫のマンコからは少しずつ中から愛液が漏れ出しており、太ももから汁が滴り落ちていた。
男に無理やり命令されて、普段の自分では絶対に使わない下品な言葉遣いをさせらる…そんな今の状態に自分でも意識しないうちに心のどこかで興奮を隠しきれていなかった。

「そうそう…w素直なのが1番…wこういうのは我を忘れて楽しんだ方が気持ち良くなれんだよw良いか？今のお前はアイドル『日野森 雫』じゃなく、ただの頭の弱いビッチギャルの『日野森 雫』なんだよwだから今までの体裁とか自分自身とかそういうのは忘れろw今この瞬間はこのプレイに集中するんだ…分かったか？w」

アイドルの『日野森 雫』ではなく、ただの頭の弱いビッチギャルの『日野森 雫』。
男は雫に対して暗示をかける様に、そしてプレイに集中させる様に逃げ道を塞いでいく。
雫をより深い所に堕とすために。

「(プレイに…集中する…。そ…そうよね…どうせこの人には逆らえないし…それならいっそ…楽しんじゃった方が…)
……はぁ〜い💕おっけぇ〜💕じゃあ今からウチも全力で楽しむし〜💕」

全力でプレイを楽しむ。
そう頭の中で考え方を切り替えた瞬間、今まで強張っていた身体からスッと無駄な力が抜けていく感覚がした。

「(あはっ…♡こういうのも確かに悪くないのかも…♡それに…今この人とシてるのはギャルの私だって思えば…少しは楽にもなりそうよね…♡)」

目の前の男と行為に及んでいるのは自分ではなく別の自分。
そう考えれば今の辛い現状も少し楽になるかもと考えたのだ。

「じゃあ始めるぞ」

「う…うん…💕」

そう言って男は再び雫の唇を奪った。
しばらくは唇と唇を触れ合わせるバードキスを楽しむと、男はまたしても問答無用で雫に舌を捩じ込んだ。

「〜〜〜〜っ！///💕」

「お前、本当これ好きだよなｗおら！テメェは今ギャルなんだからもっと下品に舌絡めろ！」

「……ふぁいっ💕…んれろっ💕んじゅるるるるるっ…💕はふっ…💕んじゅっ💕」

雫は男に言われるがまま自分の口に入って来た男の舌を招き入れる様に貪った。
舌と舌が絡み合い、唾液と唾液が混ざり合い、どちらの舌かも分からなくなっていく感覚に雫は興奮していた。
男は慣れた手つきでブラフックを外し、雫の胸をはだけさせると先ほどは触らなかった乳首を中心に弄っていく。
乳輪を回す様に…そして乳首を弾く様に触ったと思ったら次は少し強めに摘んだり…。
日野森 雫はアイドルと言えど年頃の女の子。
普通の女の子よりも頻度は少ないがオナニーぐらいは経験があった。
しかし、自分の乳首を触る事はなくいつもマンコを少し下着の外から優しく触るぐらいで満足していたのだが、男からの乳首とキスだけで先ほどから何度も軽くアクメをキめてしまっている。

「(いつも以上にイッてるな…ｗ舌も今まで以上に激しく絡めてきやがる…ｗこのプレイの効果は相当ありそうだな…ｗ)」

「ぷはぁっ…///💕…はぁ…💕…はぁ…💕」

「気持ち良かったか…？ｗもう軽く何回もイッてたみたいだが…ｗ」

「…う…うん…💕もう結構イッちゃった…💕いつも以上に頭がふわふわして…これ…ヤバいかも…💕」

ぽぉ〜…と惚ける様な艶のある表情で男を見つめる雫。
その口からは涎が溢れてしまっているが、そんな事は気にならないぐらいドキドキと心臓の鼓動が大きく鳴り響いていた。

「そうかｗそれは良かったなｗお前がエロいから…見ろｗ俺のチンポももうこんなにギンギンになっちまったｗ」

「…っ！…うわっ…💕でっか…💕なんかいつもよりも大きくない？💕ウチのギャル演技にそんなに興奮して

んの…？💕」

男がパンツを脱ぐとバチンっ！大きな音を立てて反り勃ったチンポが放り出される。
優に20cmは超えるであろうデカマラが雫の痴態によって更にバキバキになっていた。
そんな男らしいチンポから雫は目を離す事が出来なかった。

「あぁ…w自分でも驚いてるよ…wその挑発的な態度と喋り方も唆るな…w」

「ふぅ〜〜ん…ダーリンってばエッチ💕」

こんなにスラスラとギャルの喋り方が違和感なく出てくる事に雫は自分で驚いていた。
確かにギャルモノのAVを男の命令で何本も見はしたが、事前にこんなプレイをするなんて男からは聞かされてはいなかった。
にも関わらず、男を挑発する仕草や、喋り方など…今まで自分が本当にギャルだったかの様に自然と振る舞えていた。

「雫…案外ノリノリじゃねぇかw実はこういうのに元々興味あったんじゃねぇか…？w」

「…さぁ？💕どうかな〜？💕今のウチは頭弱々ギャルなんで分かりませぇ〜ん💕…ねぇ…それよりも…このギンギンになったチンポ…どうするの…？💕」

ツンツンとチンポの先っぽをイタズラする様につつくと、バキバキに反り勃ったチンポがその度にビクン💕ビクン💕と反応する。
その反応を見て雫は目を細めてしまう。

「クククっwそうだな…今のお前はアイドルじゃないもんな…w…あ〜いきなりハメてやっても良いが…まずは舐めてご奉仕してくれやw雌が優秀な雄に傅いて、ハメてくれるチンポを気持ち良くするのは当たり前だからな…w」

「(ｿﾞｸｿﾞｸｯ…💕) うん…💕そうだよね…💕ウチのマンコにハメてくれるおチンポ様にちゃ〜んとご奉仕しなきゃだよね…💕」

あぁ…いま私……この人の『雌』だ…💕

自分の目の前でギンギンと大きくなったチンポを見て雫は本能でそう感じてしまった。
雫はイキリ立ったチンポに奉仕する為に顔面の前にチンポを持ってくる様な体制になると、ぎこちないながらもイヤらしい手つきでチンポを両手で覆い上下に擦っていく。手だけでなく舌でも鬼頭をぺろぺろと舐めていく姿はアイドルの日野森 雫とは程遠い姿だった。

「だいぶチンポの扱いにも慣れてきたじゃねぇかwそうそう…舌で舐める時も裏筋とかそういうところもしっかり舐めろ…w上下の扱きもスピードを早くしたり遅くしたりして一定にならない様にしろよ…w」

「あはっ💕分かってるって…💕…れろれろ💕」

「どうだ…お前らを応援してるキモオタ共とは格が違うチンポの味は…w」

「え〜…可哀想じゃんw💕そんなの見た事ないから分かんないし〜💕」

「いやいやwアイドルとか追いかけてるキモオタなんて彼女も出来ない能無し種無し集団なんだからそうに決まってるだろw自分の女が居たらお前らアイドルなんかに幻想なんて抱かずに自分の女抱いてんだろw」

「んもぉ〜ひどぉ〜いw💕」

雫は男の言葉に反論出来なかった。
男に逆らえないからではなく、「確かに」と思ってしまったからだ。
MORE MORE JUMP!! として活動する前のアイドル活動の時期には勿論握手会なども開催された。
その時に雫を応援してくれて、握手会に訪れる様なファンは大なり小なりいかにも冴えない男性が多かった。
清潔感もなく、身嗜みもダサく、彼女など人生で1度も作った事が無さそうな男達。
当時は何とも思ってはおらず、寧ろ感謝の気持ちでいっぱいだったが、今こうして男の言葉を聞いてから改めて思い返してみると…男の言う事も一理あるなと納得してしまったのだ。

「お前も内心はそう思ってんだろ？w」

「そんな事ないって〜…ねぇダーリンそんな事よりもウチ早くダーリンのチンポ欲しいなぁ〜💕れろれろ💕」

「…くくくっwまぁ良いか…wおらっ！マンコとっととこっち向けろ！ハメてやる！w」

「あはっ💕ダーリンのチンポすっごいバキバキで格好良い〜💕早くっ💕早く早くっ💕おチンポちょうだ〜い💕」

「そう焦るなよw夜はまだまだこれからだ…今夜は楽しもうじゃねぇか…wクククっw」

あの日、男に抱かれてから数週間後… MORE MORE JUMP!! に握手会のイベントをやらないかと声がかかった。
もちろん、あの男の息がかかったイベントだ。
それを知らないみのり達は大いに喜び、これでまた MORE MORE JUMP!! を知ってもらえるとはしゃいでいた。
その為に頑張っている雫はみのり達の笑顔を見て安堵する反面、どこか少し煮え切らない様子だった。

そして握手会当日———。

MORE MORE JUMP!! のイベントは無事成功に終わり、最後に告知をしていた握手会が予定通り行われた。みのり、遥、愛莉、雫はそれぞれ自分のスペースを貰いファンの人間は握手をしたいメンバーの列へ並ぶスタイルの会場で、１つ１つがパーテーションで区切られている為、推しのメンバーと２人きりの時間を過ごす事が出来るものとなっていた。
2分の持ち時間を与えられているファン達は握手をしながらモモジャンメンバーと交流が出来るのだ。

「あっあの…！雫ちゃんいつも応援してますっ…！雫ちゃんって本当に綺麗で美しくてっ！あのっあのっ…！あははｗ色々考えてたのになんて言おうとしたから忘れちゃったｗ」

「ありがとう〜応援してくれて嬉しいわ〜。あら、忘れちゃったの？でも大丈夫、まだ時間はあるし、ゆっくり思い出してね？」

1番最初に雫のスペースに訪れたのは見るからに冴えない大学生ぐらいの男性だった。
アイロンもろくにあてていない様なシワだらけのＴシャツに整えられていない眉毛、特別崩れてもいない平凡な顔立ちで、所謂どこにでも居そうな量産型のオタクというやつだ。

「あははっｗやっぱり雫ちゃんは優しいなぁ〜ｗ女神様みたいだ…本当付き合って欲しい…ね…ねぇ…！ぶっちゃけ僕の事どう思う！？雫ちゃんの彼氏として絶対上手くやれる自信あるんだよね！」

「え…えぇ…？貴方を彼氏としてってこと…？う〜〜ん…」

オタクは女性経験が乏しく、オタク同士のコミニケーションばかり長けている為、女性との距離の詰め方が急な事が多い。
この男も推しているアイドルとはいえ突然「ぶっちゃけ自分の事どう思うか？」など聞かれては、女性としては返答に困ってしまうだろう。
それはもちろん雫も例外ではなかった。

「(は…？私と付き合いたい…？この人本気で言ってるのかしら…？どこからどう見ても私と釣り合ってないのに…？何かの冗談…？オタクの人特有のジョークなのかしら…。あの人の言ってたとおりやっぱりアイドルのオタクってこういう人しか……はぁ…。なんだろう…今までこんな事感じた事なかったのに…)」

「……いつも応援してくれて嬉しいわ…ありがとう♡でも…私はアイドルだから…♡今は皆にとってのアイドルでいたいの…だからもう少しだけ…ね？♡これからも貴方の声援を頼りにアイドル頑張りたいわ♡」

「うっ！！そ…そうだよね…！ｗいやいや冗談冗談…！ｗでもそんなに思ってくれるなんて俺嬉しいよ！！これからも全力で応援するから！！頑張ってね！」

「はぁ〜いありがと〜♡」

そう言って笑顔を崩さずアイドルとしての回答を行う雫は、自分のファンのオタク達と会話をして内心違和感を覚えていた。

その時、あの日男が言っていた言葉がふと雫の頭をよぎった。

『自分の女が居たらお前らアイドルなんかに幻想なんて抱かずに自分の女抱いてんだろw』

あぁ…改めてあの人の言う通りなのかもしれない。
ここに来ている人は皆、自分で彼女すら作れなくて私たちアイドルに幻想を抱いてる男達ばっかりで、その妄想を私達に押し付けてるんだ…。

「…気持ちわる…」

ポツリと呟く様に出た言葉に自分が1番驚いた。でも…この感情は嘘じゃない。
ここで雫は初めて自分のファンに明らかな嫌悪感を抱いたのだった。

そして握手会も終盤に差し掛かり残りの人数も数人となった頃――。

とうに雫は限界を迎えていた。

「…次の方どうぞ〜♡」

「あっ…えっと…いつもお…おお…応援してますっ…！あの…雫様ってどういう男性がタイプだったりするんですかっ！？」

次に現れた男性は見るからに気が弱そうなもやしと呼ばれていそうなオタクだ。
髪の毛はマッシュヘアーで目まで髪がかかっており、肌のケアも行なっていないのかニキビなどがあり見るだけで虫唾が走る。
着ている服もチェックのシャツにジーンズというオタク丸出しの格好だ。

「応援ありがとう♡好きな男性のタイプ？ん〜〜そうねぇ…お金もt――んっんん！」

「え？」

「あ〜ごめんなさい…何でもないの…♡えっと、ちょっと考えさせてね♡」

雫は思わず口に出そうになった言葉を引っ込めて咳払いをして誤魔化した。
かれこれ1時間以上キモオタ共の相手をして雫の感情は今にも爆発しそうだった。
今まで感じた事の無かった嫌悪の感情に飲み込まれ、徐々に雫自身にも影響が現れ始めていた。

「(ﾁｯ…なんでどいつもこいつもこんなキモい質問ばっかしてくんだよ…💢思わず素で金持ちって言いそうになったじゃねぇか💢ジーンズなんて履いてちっせえチンコおっ勃ててんのバレバレなんだよ！！💢女はダーリンみたいにチンポもデカくて！金もあって！権力もある！そんな男が好きに決まってるじゃん💢なんでキモオタってこんなちっせぇチンポばっかなん？wマジで弱小種族じゃんwはぁ…チンポのこと考えたらなん

かムラムラしてきた…。ぁ〜〜ダーリンのチンポハメたい…チンポ…。もう握手会帰っても良いかな…なんかめんどくさくなってきた…。大体なんでウチがこんなキモオタ共にニコニコ媚び媚びしなきゃなんないの？おかしくない…？はぁ……)」

雫はオタク相手に内心罵倒を繰り返したり、今まであれだけ憎かった男の事を自然とダーリン呼びになっている事に全く違和感を感じなくなっていた。
自然と目の前のオタクをこき下ろす言葉が湯水の様に溢れてきて、その度にあの男と比べてしまう。
男とのあの日の営みが雫の考えを180°歪めてしまったのだ。

「……やっぱり男らしくて優しい人かしら♡貴方がもう少し筋肉付けたら私の好みに近くなるかもね♡」

「そっ…そうなんですね！ぼ、僕もっと雫様の理想になれる様にもっともっと頑張ります…！ありがとうございました！！」

「…は〜い♡また来てね〜♡……はぁ…タイプな訳ねぇ〜だろボケ…💢」

雫はボソッと今にも唾を吐き捨てそうな勢いで罵倒の言葉を呟いた。
今日のイベントがパーテーションで区切られて居なければ他のメンバーに聞こえてしまっていたかもしれない…それぐらいの声量の罵倒だった。

そして遂に最後の1人がスペースに現れた。

「ふひひっｗつ…次は拙者の番ですなｗ雫たんまじ神ｗ今回の曲も最高に良かったですｗ特にここのパートは〜〜〜〜〜〜で！！〜〜〜〜〜〜〜だから…〜〜〜〜〜〜！！」

「あ〜〜…うん…うん…そうね…。えぇ…そうね…」

最後の1人はザ・キモオタと言った様な男だった。
体型は太っており、空調が入っているはずのこの場所でも常に粒の様な汗が吹き出している。
その汗を拭く為かは分からないが額にバンダナを巻き、メガネをかけている。
メガネも自分の指紋でべったべたで恐らく拭いてもいないんだろう。
雫推し！と書かれたシャツを身につけており、そのシャツも汗でびっしょりで酷い匂いを放っていた。
男は雫と会話をするというよりは自分の感想を永遠に話しており、ただただ気持ちよくなっていた。

「(……なんなんだよコイツぅ〜〜〜〜！💢さっきから一方的に喋ってんじゃんじゃねーか！！💢そんなに喋りたいなら壁にでも向かって喋ってろよカス！！！💢てかうわっ…ツバ飛んできてるし…きったねぇ…！この衣装高ぇんだぞ…！💢てかコイツの手ぬちゃついてたな…。どうせオナニーしかしてねぇ手で握手会に参加してんだろ〜〜な〜〜マジ死ねよ…💢匂いもくっせぇし…吐き気我慢してるこっちの身にもなれよ…なんでコイツらマジで揃いも揃って臭ぇんだよ病気かなんかなんか？マジで💢はぁ〜死ね死ね死ね死ねっ！！💢)」

「おっととw喋り過ぎてしまいましたなw雫たんと話すのが楽しくてつい…wまた来ます！これからも頑張ってください！」

「は〜〜いありがと〜〜♡頑張るわね〜♡……2度と来んじゃねぇ〜ぞボケ！💢」

雫は思わず脇に置いてあったゴミ箱を蹴り上げそうになる衝動をグッと抑えた。
その後握手会終了のアナウンスが流れ無事に今日のイベントは終了迎えたのだった。
そして会場の片付けを終わらせ、挨拶周りなどを終わらせた後、雫達が解放されたのは夜の20時を回った頃の事だった。

「今日のイベントお疲れ様でした〜！いっぱいお客さん来てくれて良かったね！」

先ほどのイベントの興奮が収まらないみのりは遥の手をぶんぶんと振る様に掴むと足も激しくバタバタと動かす。

「もう、みのりずっとそればっかり…。でもそうだね今日のイベントは成功だった…。この前のイベントはちょっとお客さん少なかったけど…今回は前よりも来てくれた人も多かったしね？」

「…え…えぇ…！そうよ！皆喜んでくれてたし良かったわね〜！握手会ってのが良かったのかしら〜？ねぇ雫！…雫？」

愛莉が雫に話を振るが雫はぼ〜っとした様に空を見つめて反応が無く、しばらくしてからはっと気付いた様に言葉を返した。

「……えっ？あっ…そ…そうね…うん…皆すごく喜んでくれて嬉しかったわ〜」

「じゃあどうする？このまま皆で打ち上げでも行こっか？」

「賛成〜！私お肉が食べたいです！」

遥の提案にすぐさま手をあげ要望を出すみのりはよほどお腹が空いてる様だった。

「もう…みのり食べ過ぎはダメよ〜？」

「はぅぅ…！わ…分かってます…！」

「雫も行くよね？」

「そうね…私も――」

ピコン…！

そんな時、雫のスマホにある1件のメッセージが送られてきた。

『うぃ〜wイベントお疲れさまwもしかしてムラムラしてじゃねぇかと思って連絡したわw抱いて欲しけりゃ今日は“お前の意思”でいつものホテルまで来いw別に命令じゃねぇから今日は来ても来なくても構わねぇよ〜それじゃw』

「…雫、アンタさっきから大丈夫？」

「……あ…えっと…ごめんなさい…今日はちょっと…遠慮しておくわ…」

雫は咄嗟にスマホをバックにしまうと精一杯の笑顔を作った。
バクバクと心臓が昂る。今すぐにでも走り出したい気持ちをぐっと堪えて雫は冷静を貫いた。

「…どうしたの？具合悪い…？」

「皆ごめんなさい…ちょっと熱っぽいみたいで…今日はお先に失礼するわね」

「そ…そう…じゃあ私が家まで送るわ！」

雫を心配した愛莉は家まで送る事を提案するが雫は咄嗟にサッと手を目の前に出しその提案を断る。

「い…良いの…！大丈夫だから…！愛莉ちゃんはみのりちゃんと遥ちゃんと打ち上げに行って？私なら大丈夫だから…！それじゃあ…！」

そう言うと雫は愛莉達の言葉を他所に早歩きでその場を後にした。
少し強引だっただろうか。怪しまれただろうか。
いや…もうそんな事はどうでも良い。

「あっ…ちょっと…！雫…！」

「雫ちゃん…何かあったのかなぁ…？」

「そうだね…確かに顔も火照って熱っぽかったかも…。私達も今日は解散にして身体を休めよっか？」

「…そうね…そうしましょうか…」

そう言ってみのり達も各々が帰路に着く。
対して雫の足取りは速く、脇目も振らない程だった。
そして30分後…雫が男に指示をされたいつものラブホテルに到着すると、部屋に入るや否や徐に服を脱ぎ捨て、男の胸元へ飛び込んで自ら唇を重ねた。

長い長いキスだった。
雫は貪る様に男の口に舌を捩じ込みお互いの舌を絡め合わせる。
その静寂の中に２人の呼吸音だけが聞こえる様だった。

「…ぷはっ…へへっｗ激しいキス…なかなか良かったぜｗ…で？ｗどうだったよ？ｗ俺の言った通りだっただろ？アイツら全員お前の事をエロい目でしか見てねぇキモオタ共だって…ｗ」

キスを終えると流れる様に男は雫を押し倒し仰向けに寝かせた。
対する雫も男から特に何も指示をされなくとも自ら股を広げ、男を受け入れる体制になりそのまま挿入を待っていた。
雫のマンコはもう既に前戯の必要など感じられないぐらいにぐしょぐしょになっており、ここに来るまでにどれだけ期待していたのかが一目で分かる。
それを見た男はニヤリとほくそ笑むと一気に挿入を行った。

「あんっ💕んっ…///💕はぃっ…💕はいっ💕キモオタマジでキモすぎましたぁっ…！💕臭いっ！💕本当ないっ！💕あり得ないっ！💕はぁっ💕はんっ！💕応援とか言って下心丸出しのクズばっかっ！💕女作れないからアイドルに幻想抱いてんじゃねぇ〜よって思いましたっ！💕お゛っ…💕あんな奴らに今まで感謝してたとか今は本当に後悔してますっ💕ダーリンが1番っ💕ダーリンとのSEXが1番気持ち良いですぅ〜〜！💕んぎぃっ☆★💕」

「ギャハハっ！ｗ良いぞ良いぞ〜！ｗお前キモオタの悪口言ってる時めっちゃマンコ締めつけて来てんぞ〜分かってる？ｗキモオタ馬鹿にすんの気持ち良いだろｗ」

「はいっ💕気持ち良いっ！💕気持ち良いですぅっ！💕キモオタ馬鹿にしながらチンポハメるのやばいっ💕興奮するっ💕あはっ💕どんどん私がっ…私じゃなくなってっ…！💕おほぉっ💕あっ💕ごめんなさいっ💕ウチっ💕ウチでしたっ💕ウチがウチじゃなくなる感じが興奮すんのっ💕これすごいっ💕ヤバいっ💕もっと…💕もっと突いてっ！💕お゛ぉっ！💕気持ち良いぃ…💕チンポ最っっっ高💕💕んひぃっ💕」

バチバチっ！💕と脳に電流が走る様な刺激が雫を襲う。
普段であれば絶対に言わない様なセリフもスラスラと口から出て来てしまう。
そして、それを言ってしまっている自分自身にまた最高に興奮していた。

「クククっｗ堕ちたな雫…ｗおらっ！膣内に出すぞっ！ｗちゃんと受け取れよっ！ｗ」

「射精してっ！💕射精して射精してぇっ！💕ウチのマンコにダーリンのデカチンミルク注いでぇっ！💕イっっっっっくぅぅぅぅぅぅっ！💕💕」

ドピュルルルルルルルルルっ！！💕💕

「はぁっ…💕はぁっ…💕ぁ…💕すごっ…💕射精てるっ💕ドクドク射精てるっ💕」

「…ふぅ〜出した出したｗあ、そうそういつも通りちゃんとピル飲んどけよ？ｗ」

「はぁ〜〜い💕分かってま〜〜しゅ💕んひっ💕」

男はひとしきり射精し終えるといつもの様に側に置いていたタバコを取り出しライターで火を付けた。

「…おい雫、お前も吸えよｗ」

「え？タバコ？ま…まぁ…一本だけなら…💕」

今までの雫であれば絶対に断っていた提案だが、今の雫は男の全てを受け入れたい…その様な思想に染まっていた。
男に言われるままタバコを口に咥え、男が出したライターに近付き火をつけた。
男の見よう見真似で人差し指と中指でタバコを摘みそのままの勢いで思い切り煙を吸い込む。

「すぅぅぅぅ〜〜〜〜💕……げほっげほっげほっ！ぅ…凄い煙たいわ…」

「まぁ、最初はそんなもんだｗ煙吸い込んでちゃんと吐きださねぇとダメなんだよｗあ、それちゃんと一本は吸えよ？あとほれ、この酒も飲めｗ」

男はまたしても側に置いてあった酒の缶を雫に投げ渡した。
雫は上手くそれをキャッチし、缶のパッケージをニタニタと見つめ少しすると何の抵抗も無く缶の封を開ける。

「未成年飲酒に喫煙…こんなの本当に頭の弱いギャルみたい…💕最低…💕んぐっ💕んっ💕んっ💕んっ…ぷはぁっ💕あれ？お酒は意外と飲めちゃう…寧ろ美味しいかも…💕なんだ…あんまりジュースと変わんないじゃない💕」

「それは度数が大した事ねぇからなｗだがなかなか良い飲みっぷりだｗもうすっかり頭の弱いギャルにハマったんじゃないか？ｗ」

「ん〜まぁちょっとだけね💕いつもより気持ち良かったしハマってないって言ったら嘘になるけど…💕てか…ダーリンってばさっきウチのことハめたばっかなのにもうギンギンじゃん…やばすぎ…💕」

先ほどハメて一度思い切り射精しているにも関わらず男のチンポはまたしても勢いを取り戻していた。
雫はその光景を見て思わず笑みが溢れ、舌で唇をペロリと舐める。
その目はまさに優秀な雄に傅かんとする雌の目だった。

「(あぁ…何て男らしい…💕さっきまで群がってたキモオタとはまるで違うわ…💕男としてのスペックも…顔も…財力も…権力も…💕何一つとしてアイツらが勝ってる所がない…雄としての価値…💕これが雌として私が仕えるべき相手…なのね…💕)」

「お前がエロいからなｗおらそのタバコ吸い終わったら２回戦やんぞｗ次はバックで突いてやるよｗ」

「え？マジ？💕じゃあタバコ早く吸わないとじゃん💕すぅぅ〜〜〜〜〜〜……ふぅ〜〜〜💕あはっ💕ちゃんと吐き出せた💕確かにこれは……ｿﾞｸｿﾞｸｯ💕ハマっちゃうかも…💕吸ってると頭がスッキリすんね💕」

「だろ？ｗ雫お前なかなか筋が良いじゃねぇかｗ」

「あはっ💕ありがとダーリン💕でもほらっ…💕もう吸い終わったからウチダーリンのおチンポ欲しいなぁ〜💕」

雫はそう言うとすぐに男に向かって両手でマンコをぐいっと広げケツを突き出した。
男の劣情を誘う様に下品な笑みを浮かべ、フリフリと自らのケツを振るその姿に少し前までの清楚な日野森雫の姿はなかった。

「あぁ…心配すんな…wケツ穴でも感じるドすけべビッチに躾けてやるよｗ」

あれからしばらくして何度かイベントを行うもあまり集客は行えず、MORE MORE JUMP!! は解散の危機に陥った。
しばらくして愛莉が姿を消し、その後すぐに雫も学校にすら行かなくなり、連絡も付かなくなってしまった。

「ふぅ〜〜〜❤️あはっ…❤️うんまっ…❤️やっぱこれ辞めらんなぁ〜〜いｗ❤️マジ美味すぎっしょｗ❤️」

「クククっｗあの日野森 雫がもう今じゃ見る影もねぇなｗすっかりタバコや酒にもハマっちまって中毒になってやがるｗ」

「え〜〜？❤️酷くなぁ〜い？ｗ❤️そういう女に堕としたのはダーリンなんだけどぉ〜？ｗ❤️…まぁ良いけどね〜ｗ❤️アイドルとかマジでかっ怠かったしｗ❤️今となっては辞めれてラッキー的な？ｗ❤️あんなキモオタ達に媚び売ってキャピキャピしてるよりこうやってダーリンとズコバコSEXしてる方が何百倍も楽し〜しぃ？ｗ❤️ギャハハっｗ❤️」

そう言いながら下品に笑う女こそ、 現在の日野森 雫その人だった。
髪は金色の霞んだ色に染め、綺麗だった髪はすっかり傷みきってしまっている。
肌も黒く焼きすっかりガングロ肌になっており、至る所にピアスが開けられていた。
耳やへそ、舌に至るまでピアスだらけで見るからに下品な女だった。
化粧も濃く、紫のアイシャドウに水色の濃い色のリップを付けており唇はぽってりとした印象を受ける。

「まぁそれもそうかｗ身体の隅々まで俺好みになってくれて嬉しいぜ雫ｗこんなに胸もケツもデカくしちまってよｗ少し前まではあんなにスレンダーだったのに…クククっｗ」

「ダーリンの好みになれるならなんでもするなんて当たり前ぢゃん？w❤️アタシにとってはダーリンが神だし❤️ダーリンが整形しろ〜って言うなら喜んでそうするから❤️あはっ❤️まぁアタシも昔のほっそいだけのダッサい身体よりも今のエロエロボディの方が気に入ってるけどね〜w❤️こっちの方がダーリンのチンポも反応してくれるし…ね？❤️」

雫の胸もケツも男の指示によって豊胸・豊尻手術を行なっており今までの2倍ほどのサイズになっている。
今まで雫はスレンダーな身体つきだったが、歩くたびにゆさゆさと揺れる様は外国の娼婦の様で、まさに男に媚びる事しか出来ない身体だった。

「おう…w俺は整った女をメイクとか整形で弄ってエロい事にしか使えない下品な女に堕とすのが何よりも興奮すんだよ…wそれで言うと雫…お前は俺の最高傑作だｗず〜〜っと狙ってただけあってここまでのクソ女に堕ちてくれて俺は満足してるぜｗ」

「ほんと最低〜〜〜ｗ❤️マジでダーリンってば、女の子の事自分のおもちゃとしか見てないよねぇ〜〜ｗ❤️まぁそれに惚れちゃうアタシもアタシなんだけどさぁ…w❤️んで…？ｗ今日は何する〜〜？ダーリン1日暇なんでしょ？ｗショッピングとか行く？それかムラムラしてんなら別に1日パコっても良いよ❤️ダーリンの命令ならどんな事でもしたげる❤️」

雫はギャハハと下品な声をあげて笑う。
もはや雫は男至上主義の完全なるビッチギャルに堕ちており、どれだけ男が最低な事を言おうがお構いなしなのだ。

「そうだなぁ…別段これと言って買いてぇ物はねぇから買い物はいいわ。そんな事より、おめぇが居たアイドルグループ…2人でも頑張ってるらしいなｗ」

「ぁ〜ねｗ❤️まぁでも2人だから MORE MORE JUMP!! じゃなくて名前変えて活動してるらしいぢゃん？ｗ❤️ま、もうアタシにはど〜でも良いけどｗアイドルなんて良く続けられるよね〜ｗあんなキモオタに媚び媚びしてさ…wよくやるわｗ」

「おいおい酷ぇな…wちょっと前までお前も同じ事やってたじゃねぇ〜かｗ」

「え？ｗあ、そっかｗ❤️なんかもうすっかり忘れてたわｗ」

少し前までは同じ志を持つ大切な仲間だったみのりと遥の事などもはやどうでも良いと言うように罵詈雑言を吐き捨てる雫。
仲間想いでメンバーの誰よりもお淑やかだった彼女の口からそんな言葉が出て来るまでに堕ちた事を男は内心ほくそ笑んでいた。

「クククっｗ…そんなアイドルをもうすっかり忘れちまったお前に少し刺激のあるプレイを提案してやるよｗ」

「え〜何それｗ❤️どんなことすんの〜？ｗ❤️」

「それはだな───w」

MORE MORE JUMP!! は愛莉と雫が居なくなった後はSNSアカウントなどの更新も途絶え、今はみのりと遥が2人ユニットでの活動を行っている。
更新が途絶えたアカウントは削除されず、放置されたままになっていたが、そんなモモジャンアカウントに突如として、動画サイトのリンクが貼られた投稿が行われた。
そのリンクから動画サイトに飛ぶと高額なメンバーシップに入る様に促され、配信を見るには最低でも10,000円程支払わなければ見る事が出来ない仕様になっていた。
配信ページには『日野森 雫から皆さんへ』のタイトルが書かれており、ちょうど今から30分後に配信を開始する様だ。

『雫ちゃんが配信してくれるだけで嬉しい…』
『色々と気になってた』
『でもなんで10,000円払わないと見れないんだ…？まぁ払ったんだけどw」

しばらくするとコメントが次々に投稿され、同時接続人数は高額にも関わらず100人を超えた。
ある者は純粋に活動を休止している雫の姿を見る為に、ある者は冷やかし程度に…それぞれがそれぞれの思惑を持ってこの高額メンバーシップに加入し動画の配信を待っていた。

そして遂に──動画の配信が始まった。

「はぁ〜い♡皆さんこんにちは♡お久しぶりです♡ひとしずくの幸せ、とどけます♡ MORE MORE JUMPの日野森 雫です♡皆、見に来てくれてありがとう〜♡とっても嬉しいわ♡」

そこには姿こそ下品な姿になっているが今までと変わらない清楚な雰囲気の日野森 雫が居た。
溢れ出る母性的なオーラに、柔らかい言葉遣い。
見た目こそかなり変わってしまっているが、そこに居るのは確かに『日野森 雫』だった。

『どうしたのその格好…？』
『最近姿見れなくて心配してたよ〜！！』
『髪も染めちゃったの…？昔の髪色綺麗で好きだったのに…』
『でも元気そうで良かった〜！』
『その格好何かの撮影の衣装？』

そう口々にオタク達はコメントを打ち込んでいく。
画面に映し出された瞬間はギョッとした者もいたが、何かの映画の番宣や役作りなのかもしれないとそれぞれが自分を納得させた。

「あはっ…wそうそう…そうなの〜wこれはちょっと…wふふふっ…wあるドラマの撮影でね…w私が演じるのはDQN…？って言われてる様な怖〜い女の子の役なのよ♡だからこうやっていつもとは違う格好をしている

の…w皆すごいわね〜w♡やっぱりそういうのに皆は詳しいのね♡」

『あぁ…そうだよねびっくりした〜！』
『それほどでも…あるかなw』
『どんな雫様でも良いです…！』
『活動休止って聞いてたけど…？』

雫の口からドラマの撮影だと聞かされると今まで疑念を抱いていたオタク達は安堵した様で先ほどよりもコメントの量が増加した。
しばらく雫はオタク達が打ち込んだそれぞれのコメントに返しながら会話を行い、ある程度経った頃何人かが雫の活動休止について質問のコメントを投げかけた。

「あぁ活動…？そうね〜…今はちょっとアイドル活動は休止してるの…ごめんなさい♡こっちの撮影に集中したくって…学校にも事情を説明してお休みをしているの♡皆を驚かせる為になかなか報告出来なくてごめんなさい…w♡でもこうやって挨拶出来たんだから…皆許してくれるわよね…？w♡」

『雫ちゃんが元気ならそれで良いよ！』
『でもなんで高額メンバーシップ…？』
『↑バカお前野次馬とかが湧いたらめんどくせぇからだろ』

「そうそう…こういう高額のメンバーシップに入ってくれる様な馬鹿な奴らだと何言っても騙せr―――んんっ！色んな人に言っちゃうと変な噂が流れちゃうかもしれないでしょ？♡だから私の事を心の底から応援してくれる皆にまずは報告しようと思ったの…w♡」

『な〜んだそう言う事か〜』
『なんか今変なこと言ってなかった？』
『まぁ俺たちは雫さん第一だからね…ｷﾘｯ』

「まぁ…♡皆優しくて嬉しいわ…♡ありがとう♡それと私の演じる役についてなんだけど……あ…皆ごめんなさい…♡ちょっと吸わせてもらうわね…♡」

『え？』
『吸う？』
『なに…？何を吸うの…？』

そう言うと雫は突然画面外からタバコとライター持ち出しカチッ！カチッ！シュボッ…！と慣れた手つきでライターで火をつけると、タバコを口に咥えて煙を吸い込んだ。

「すぅ〜〜〜〜、ふぅ〜〜〜〜…❤あ゛ぁ〜❤ヤニうっま…w❤え〜〜っと…なんだっけ？wあぁ…そうそう…アタシが演じる役の話かw❤アタ…んっんん！私が演じる役はこんな感じで未成年なのにタバコも吸っちゃう本当に素行の悪ぅ〜い女の子なの♡…え？w♡私には似合わない？…うっせぇよwまだ人が喋ってんだ

ろｗそれでね…♡」

先ほどまでとは違い明らかに態度の違う雫に動揺を隠せないオタク達。
タバコを嗜める様なコメントに対しても『うるさい』と吐き捨てスパスパとそれはもう美味しそうにタバコを堪能していた。

『なんか…やっぱりおかしくない…？』
『それって作り物で別に本物のタバコじゃないよね…？』
『なんか雫さんが雫さんじゃないみたい…』

「あ、このタバコ…？あ〜そうそう…ｗ作り物作り物〜ｗ❤️セットだよセットｗそんなに心配すんなってｗ❤️でも作り物でも…すぅ〜〜〜〜〜……はぁ〜キまるぅ〜〜…❤️ひひっｗヤニ美味すぎる…ｗ❤️こんな感じで演技してるのよ…ｗ❤️それと…あとはこれねｗぢゃ〜〜んｗ❤️」

『それってお酒…？』
『いや…まさか…中身はジュースでしょ？』

雫はまたしても画面外からある物を取り出し画面に大きく見せつける。
その缶は銀色で誰もが一度は見た事がある有名なお酒だった。

「んくっんくっ、ぷはぁ〜〜❤️うんまっｗ❤️これこれ…ｗ❤️おっ、やっべ…出る…━━━━ゲェェェェェェェプ！！🤎」

『え…ゲップ…？』
『なんか…流石にこれはちょっと…』
『し…雫ちゃん…？』

「あぁ〜ん？ｗ❤️あれ？ｗなに？ｗ皆どうしたの？ｗ演技演技ｗぜぇ〜んぶ演技だってぇ〜ｗ❤️結構アタシ演技派っしょ？ｗ❤️ギャハハっｗ❤️なんかこういう役向いてるね〜ｗ❤️って監督？みたいな人にも言われんだよね〜ｗ❤️あれっ…ダーリンもう良いの？❤️」

「あぁ…充分楽しんだからな…ｗ」

しばらくすると男が画面の横から現れ雫の頭にポンと手を置いた。
そして雫の横にどさりと座ると徐に大きく下品に育った雫の胸を揉み出した。

「あんっｗ❤️ちょっいきなりっ❤️んもぅ…ダーリンったら❤️」

『なんだコイツ…！雫さんに何してんだ！』
『え？え？演技…？レイプ…？え？え？』
『もしかしてって思ってたけどやっぱり…』

「ギャハハハハハっw❤️そうでぇ〜〜〜すw❤️さっきまでのは別に演技じゃありませぇ〜〜んw❤️アタシ日野森 雫はぁ…ダーリン専用のビッチギャルになっちゃいましたぁ〜〜w❤️今までの清楚な方が演技でぇ〜〜すw❤️ギャハハハハハっw❤️びっくりした？wねぇねぇ？wびっくりしたぁ〜〜〜？w❤️」

「まぁそういう事なんだわwお前らが好きな『雫様』は俺専用にしっかり躾けさせてもらったからw」

雫の突然のカミングアウトにコメント欄は騒然となり、様々なコメントが打ち込まれる。
発狂する者、悲しむ者、現実を受け入れない者、それぞれがそれぞれ好き好きにコメントを打ち込みものすごい勢いでコメント欄が流れていく。

「そういうことぉ〜〜wダーリンが鬼畜でごめんねぇ〜〜wキモオタくんたちぃ〜〜wでも良かったぢゃん？wお前らが好きだったアタシのエロいところが見れんだよ〜？wどうせアンタらアタシの妄想でシコってたんでしょ？w こんな事滅多にないし…超レア！w一生のおかず決定〜wだからテメェらは虚しくアタシとダーリンのラブラブ具合を見て1人寂しく短小チンポシコシコしとけ！wギャハハw❤️」

雫はそう吐き捨てると中指をビッ！と立て、長い舌をダラリと垂らす。
心の底からオタクを馬鹿にした様な表情のその姿はどこからどう見ても頭の弱いDQNギャルにしか見えなかった。

『あぁ…あぁ…雫さん…』
『雫さんはそんな事言わない…！』
『嘘だ…これは夢かなんかだ…』

「とか言ってさぁw全然同接減んないぢゃんw興奮してんだろ？w好きなアイドルが自分じゃ絶対勝てないイケメンの男に堕とされて…wこぉ〜んなビッチに堕とされてさぁ…wお前らアタシの事見て清楚清楚ってうるさかったもんねぇ〜〜w女に清楚さ求めてるやつって本当童貞臭いわwお前らの匂いも臭いけどwなんかお前らって顔見るだけで『僕は童貞で〜すw』って言っちゃってんだよねw分かる？w童貞臭さが溢れ出ちゃってんのwダーリンみたいなイケメンとは大違い〜❤️お前らは根っからの負け犬なんだよ…w…ぺっ！！」

雫はカメラに向かって痰を吐き捨てるとベチャッ！🤎と汚い汁と共にへばりついた。
それを見て更に大笑いをする雫にオタク達は呆然としてしまう。
しかし、こんなの日野森 雫じゃないと思いながらも…別人に染まりきってしまった彼女の姿からほとんどのオタクは目を背ける事が出来ずにいた。

「おいおい雫…wあんまり言い過ぎたらオタク君達が可哀想じゃねぇか？w」

「そんな事無いってwコイツら絶対喜んでるよwおい、これ見てるマゾ共！wもぉ〜っとアタシのエロいとこ見たかったら投げ銭しろよw余裕だろ？w 女とかいねぇし服にも金かけないから…お前らキモオタは金だけはあるもんなwほらほらぁ〜見たくないのかなぁ〜？w♡別にアタシらはもうここで配信終わっても良いんだよ？w終わった後でゆっくりダーリンとパコパコすっから…w❤️続きが見れるかどうかはお前らの頑張り

次第ってこと…w分かる？w負け犬おチンポちこちこさせてくださぁ〜い♡って金投げながらおねだりしろよwほらほらw」

『流石にこれは引く…ファン辞めます…』
『雫さん…ずっと応援してたのに…』

雫の過度な暴言や行動に流石に愛想を尽かしたファンも居るようで先程から同時接続人数は少しずつ減り続けていた。

「あ〜ん？wんだよ…シけてるやつもいる見たいだけど…まぁいっかwほらほら残ってるお前らはどうすんの〜？w…はぁ…早くしねぇと終わるぞマジで！💢こっちはダーリンのチンポ焦らされてイライラしてんだよ💢払うんだったらとっとと払えやカスマゾ共がよ💢あぁん？💢」

『10,000円　あっあっあっ…』
『5,000円　こ…これはその…』
『15,000円　あぁ…はいぃ…お願いします…♡』

オタク達は皆それぞれに投げ銭を行い、雫の痴態を見せて欲しいと懇願する。
ここまで言われても尚、お金を差し出し興奮しているオタク達は“弱者男性”と呼ばれているそれでしかなかった。

「…あはっwマジで払ってるしwそんなにアタシのエロいとこ見たかったんだ〜？w…きんも…wマジで終わってんねアンタらwそんなんだともう一生彼女出来ないんじゃなぁ〜〜い？wだって…ねぇ？w好きだったアイドルが堕とされてこんなクソビッチになってんの見て興奮してんでしょ？wほんとウケるわw…じゃあほらアタシが寝取られたつもりでちっせぇチンコシコシコしなよwまぁ別に最初っからアンタ達のもんじゃないけどねw何でもかんでもお前らNTRとか寝取られって言うけどさぁ…別にお前らのじゃねぇ〜からwそこんとこ勘違いすんな？マジでw」

『15,000円　ごめんなさい♡ごめんなさい♡』
『10,000円　ぶひぃぃ…♡』

雫にどれだけ強い言葉を投げかけらて罵倒されてもオタク達は自らお金を投げ、それにとてつもなく興奮していた。
最早名実共にマゾ豚に堕ちてしまったオタク達はこれ以降の人生きっと寝取られマゾとして生きていくしかない程性癖を歪められてしまっただろう。
雫はそんな事に全く興味が無いように男に抱きつき、すぐさま下着の上からさわさわ❤️とチンポを触り出すのだった。

「ねぇ〜ダーリンそろそろハメてよぉ〜❤️アタシのマンコもう準備万端なんですけどぉ〜❤️ずぅ〜っとハメたかったのにダーリンがお預けするからマンコから汁だらっだらなんだけどw❤️ねぇねぇ〜❤️」

「まぁ待て…wいきなりSEXじゃあコイツらもびっくりしちまうだろ？wまずはベロチューから教えてやらねぇと…な？w」

「え〜アタシはもうすぐにでもチンポ欲しいのに〜❤️まぁいっか❤️ダーリンの命令なら仕方ないよね〜❤️おい、キモオタ共wアタシとダーリンのラブラブベロチュー見せてやるから感謝してシコれよ？wキッショい喘ぎ声あげながらシコれw」

『もうやめてくれ…』
『こんな雫さん見たくないよ…』

「はっw見たくないとか言って配信見てんの意味分かんね〜w口ではそう言ってどうせチンコシコりながら見てんだろ？wダッセェ〜な！w…あっ❤️ダーリンごめんなさい❤️ベロチューねベロチュー❤️うん❤️するする❤️…じゃあお前らキモオタ共ちゃんと見とけよ？wアタシがダーリンに仕込まれたエッグいベロチュー見せてやるからwんぁ〜〜…❤️」

そう言って雫が男に向かって舌を突き出しキスをしようとした瞬間にカメラがガタンっ！と音を立てて倒れ画面には床だけが映し出された。
雫達はそんな事もお構いなしにそのまま下品なキスを続ける。

『え…ちょっと…！肝心なところなのに！』
『キスみたいキスみたいキスみたいキスみたい』
『雫様気付いて〜！！』

「んれろぉん…❤️んちゅるっ…❤️じゅるるるっ❤️ぶちゅっ❤️ちゅっ❤️ちゅっ❤️んふふっ…❤️ダーリンの舌柔らかくてうまっ…❤️ふぅ〜っ❤️んれろんれろぉんっ❤️んっ❤️ぁんっ❤️じゅぞぞぞぞっ❤️んじゅるるるっ❤️うまっ❤️ツバうんまっ…❤️タバコ臭くて好き…❤️ダーリン格好良すぎぃ…❤️んちゅっ❤️」

『うわぁ…わっ…わっ…』
『音だけなのにエッロ…やばい…』
『雫さんもう俺たちの事忘れてるんじゃ…』

倒れたカメラを気にも留めず、男とのキスを貪る雫。
ベロ同士を唇の外で触れ合わせ、その状態で絡めてお互いの唾を啜る様に舐め回ししばらく堪能した後、そのままお互いの口内に挿入し歯の裏や奥歯の奥まで舌で貪っていく。
わざとらしく下品な音をたてながら行うキスは画面に映し出されていない事でより扇状的に響き渡り、オタク達は自分の息子を握る手がギュッと強まるのだった。

「んじゅるるるっ…❤️ぷはぁっ…❤️はぁっ…❤️はぁっ…❤️…あ？ぁ〜〜やべっwすっかりオマエらの事忘れてたわwどう？wこれがお前らキモオタじゃ一生かかっても絶対出来ない様なダーリンとのベロチュー❤️エロかったっしょ？w❤️…あれ？wごっめぇ〜んカメラ倒れてたwじゃあもしかして今のアタシとダーリンのベロチュー見れて無かったんだ？wあ〜あ…w残念でしたw本当お前らキモオタは運も無いよなw逆にお前

らに何があるんだよｗギャハハハハハｗ」

『5,000 もう一回見せて欲しい…』
『さっきお金払ったのに…』
『うぅ…雫さん…酷いよぉ…』

「ごちゃごちゃうるせぇ〜よ雑魚雄💢なんでアタシがひでぇみてぇに言われねぇといけねぇんだよ💢イライラすんなぁ💢さっきのは事故だろ事・故！💢恨むならテメェらの運の無さを恨めよ💢別に音は聞こえてたんだろ？じゃあ良いぢゃん💢アタシとダーリンのベロチューの音聞けるだけでも感謝して欲しいぐらいだわ💢」

雫はオタク達からのコメントに声を荒げて反論する。
男に堕とされギャルビッチに染められた雫は、沸点が限りなく低くなっており、少しの事で声を荒げてキレ散らかしてしまう。
もちろん男に対しては絶対的に崇拝しており、男至上主義の最底辺のビッチになった事を何よりも表していた。

「おいおい雫まぁそう怒るなってｗコイツらもお前のエロい姿見たかったんだろｗだってAVぐらいでしかこんなシーン見れねぇんだから必死になるのもしょうがねぇってｗ」

「あ〜そっかｗ確かにねｗお前らキモオタは女の裸も生で見た事無い雑魚ばっかだもんねｗ何かに付けてブヒブヒ文句を言うだけで声がデカいだけの無能集団ｗ本当かわいそ〜…ｗアタシが男だったら絶対キモオタだけはなりたくないわ〜…お前らキモオタってアニメとかゲームとかばっかしてんでしょ？ｗそんでもってアイドルにエロい目向けて応援してるつもりになってさｗ本当かわいそｗ結局自分に都合の良い妄想しか信じられないんでちゅね〜ｗ」

「クククっｗあんまり言ってやるなって雫…ｗキモオタ君達黙っちゃって何も言えなくなっちゃうだろ…w」

ぷぷぷ…w❤️とオタク達を馬鹿にして笑う雫のその目は、完全に自分よりも立場の弱い弱者を見下す優しさのカケラも無い目線だった。
その見下された目線にオタク達はまたゾクゾクと興奮し各自で感謝の投げ銭を行うのだった。

「あはっｗごめ〜んｗ本当の事すぎて傷付いちゃった？ｗギャハハハハハｗ…あｗそうだ…そんなにエロいのが見たいんだったらさぁ…良いもん見せてあげよっか…ｗんしょっと…w」

雫はそう言うとカメラの前で後ろ向きになりケツをカメラのレンズに突き出す様に前に出し、画面には黒光りした２つの肌が映し出された。

「ふふっｗどう？ｗアタシのケツ…❤️エロいっしょ？ｗアンタらがもぉ〜っとお金投げてくれたらアタシのケツ穴も見せてあげるんだけどなぁ〜？ｗ」

『25,000 お願いします』
『10,000 ケツ穴見たい…！』
『15,000 うおおおおおお』

「ギャハハｗほんとチョロくて助かるわｗありがとキモオタくぅ〜んｗじゃあしゃーねぇから見せてやんよ…ほら…見える？ｗアタシのア・ナ・ル❤️ダーリンにケツ穴も使ってもらってるから結構ガバっちゃったけどｗキモオタのお前らにはアタシのケツ穴で充分でしょｗぁ〜なんかムラついてきた…❤️ねぇダーリンチンポぉ〜チンポちょうだぁ〜い❤️」

画面に大きな尻を突き出したまま男の股間へ顔を埋めパンツをずり下ろした雫はそのままシコシコと男のチンポを扱き出しおねだりをする。
それに満足した男は雫の頭を撫でながらペチペチと大きくなったチンポで雫の頬を叩いきながら笑う。

「おいおいキモオタにケツ穴見せて興奮しちまったのかぁ？ｗどっちがマゾなんだかｗほらよ、しゃぶれやｗ」

「あはっ❤️頂きまぁ〜す❤️んじゅるるるるっ❤️ぶもっ…❤️うるふぁいなぁ…❤️べふに良いぢゃん❤️さっきからアタシもマンコお預けにされてんだからさぁ〜❤️チンポの味が恋しくなっちゃったんぢゃん？❤️じゅぞぞぞぞっ❤️」

『顔…顔見せて…！』
『肝心のチンポしゃぶってるところ見えない…』
『また音だけかよくそっ…』

カメラにはケツを向けている為、肝心なフェラシーンは後ろからしか見えずまたしてもイヤらしいフェラ音だけが響き渡る。
しかし、チンポをぶっぽ❤️ぶっぽ❤️としゃぶる度にぶるん❤️ぶるん❤️と黒光りしたケツが揺れ、どれだけ必死にチンポを貪っているのかが伝わって来る様だった。

「キモオタ君たちが雫のぶっさいくなフェラ顔見たがってんぞ〜ｗどうする？ｗ」

「え〜？ｗ❤️ダメダメ❤️『こんなぶっさいくなフェラ顔見せたらきっと皆…私の事嫌いになっちゃうわ…♡』…なんつってｗお前らはアタシのケツ穴でも見てたら良いんだから文句言うんじゃねぇ〜よ💢アタシのケツ穴見れるだけでもありがたいと思えっ！💢」

雫は敢えて昔の喋り方をしながらオタクを煽ると、その後ケツ穴がもこっ❤️と広がりそこからぶっ！🤎ぷすっ！🤎ぶぴっ！🤎ぶぷぅっ！🤎と臭そうな屁を何発もぶっこいた。
屁をこくたびにうっすらと生えたケツ毛が風で揺れ汗でテカテカになったケツ穴が下品な一方でヤケに扇状的に映った。

「あｗ屁出ちゃったｗいや〜ん恥ずかしい〜ｗ…まぁでもお前らキモオタからしたらご褒美かｗ

好きだったアイドルの屁こき姿見れるとかある意味ちょ〜レアだからねｗ一生のおかずにしな〜？ｗ」

『下品過ぎるよ…雫さん…』
『うぅ…前まではあんなに清楚だったのに…』
『マジで臭そう』

「ほらほらｗもっとお金投げたらマンコとかSEXも見れちゃうかもね〜ｗおらｗ出せ！ｗお前らが持ってる金ぜぇ〜んぶアタシに出せ出せｗギャハハハハハｗ」

『50,000 見たい見たい』
『50,000 持ってけこのクソビッチ！』
『50,000 よろしくお願いします』

「はい毎度あり〜ｗお前らマジで必死すぎなｗぁ〜なんだっけこう言うの…赤スパ？ｗだっけ…？ｗ本当金だけはあるね〜お前らはｗまぁでもお前らみたいなキモオタがそんなにお金持ってても仕方ないし？…アタシらがゆーこーかつよー？してやるからさ…ｗ感謝しろよ〜？ｗ短小キモオタくんｗ」

「じゃあコイツらも期待してるみたいだしそろそろハメるかｗ結構金も集まったしなｗ」

男がそう言うと雫をカメラの方へ向け、雫の後ろに男が座る様な体制へと変えた。
何度も射精しているにも関わらず男のチンポは未だにギンギンに勃起しており、そのチンポを横目に鼻の下を伸ばしながら舌舐めずりをする雫。
この光景だけで雫が心の底からこの男に堕ちてしまっている事が一目で分かる。

「はぁ〜い❤ダーリン❤もうアタシのマンコびしょびしょ過ぎてマジでヤバいんだけどｗ❤子宮がきゅんきゅんってチンポ欲しがっちゃってる❤早くっ❤早く早く❤」

「そう焦るなよｗほらちゃんとキモオタ君たちにもうアイドルはやらないって事伝えてやらねぇと可哀想だろ？ｗアイドル引退宣言したらハメてやるよｗ」

「うひひっｗ❤ダーリンってば鬼畜〜ｗ❤コイツらにそんなもの見せたら失神して死んじゃうかもよ〜？ｗ❤」

そう言いながらチンポに跨る様にガニ股になって腰を落とし、あと少し腰を落とすだけでマンコに入ってしまうところギリギリで止める。
マンコからはとろぉ〜❤っと汁が漏れ出してきており、もう我慢出来ないと言った様な感じでヘコヘコ❤と腰を動かし亀頭とマンコの入り口で何度もキスをするかの様だった。

「お前もさっきから屁とかこいたりしてるから今更だろｗおらっｗとっとと言え！ｗ」

男にバチンっ！と尻を叩かれると雫はぉほっ❤と汚い声をあげ、男の命令通りにカメラに向かって宣言し

た。

「あはっｗ❤確かにｗ❤それもそうかもｗ❤はぁ〜〜いｗ❤じゃあ言っちゃいまぁ〜〜すｗ❤アタシぃ…日野森 雫はぁ…❤今日でアイドル辞めまぁ〜〜すｗ❤これからはぁ……いや…これからもぉ…アタシはダーリン専用のギャルビッチ嫁として一生を過ごしまぁ〜〜す❤お前らキモオタ共は今日のこの配信を目に焼き付けて一生短小チンポシコシコ1人でシコってろｗバぁ〜〜〜〜〜〜カ！！ｗ」

「クククっｗはい…よく出来まし……たっ！ｗ」

「お゛っ！！！☆★❤❤❤❤」

その瞬間男は雫の肩を掴み一気に引きずり落とすと物凄い勢いでマンコを貫き、今まで1番の下品なオホ声をあげた。
そしてそのまま下品なSEX配信が始まったがとてもじゃないがオタク達には刺激が強く、ただ元好きだったアイドルが自分よりも強い男に抱かれてよがらされてる姿を自分の小さいチンポを握りながら見つめる事しか出来なかった。

雫のアイドル引退配信は伝説となり、その後日野森 雫が芸能界や表舞台に立つ事はなかった。
今も男の都合の良い女として暮らしているのか、はたまたAVなどの業界で働いているのか…。それは誰にも分からなかった。

ここはあるホテルの一室…。
そこで雫は男に何も伝えられないまま連れてこられた。

「…ねぇダーリン今日はここで何するの…？❤」

「まぁ落ち着けってｗお前にはまずこのAVを見てもらおうと思ってな…w」

そう言うと男はある一本のAVを雫に手渡した。

「AV…？ふぅ〜ん…何これ…『恐怖！変態鼻ほじ女！！』…？…ふっｗきもッ…w」

そこには、無様にブサイク面を晒し鼻をほじくり出している桃色の髪をした女がパッケージにデカデカと写っているのだった。